

1975年度木簡研究集会

歴史研究室

木簡研究集会は、1976年1月13・14日の両日にわたって、平城宮跡発掘調査部資料館会議室において、日本史・考古学・東洋史の関係諸分野から41名の研究者の参加を得て開催された。この研究集会は、1961年の平城宮跡における木簡出土以来、全国各地の遺跡から木簡の出土が相次いでいる現況にかんがみ、関係諸分野の協力に基づく、木簡の基本的・総合的な研究を目的としたものである。

第1日目は、全国各地における木簡出土の現況を明らかにするため、飛鳥地方遺跡（報告者網干善教）、藤原宮跡（和田萃・鬼頭清明）、平城宮跡（横田拓実）、多賀城跡（平川南）、大宰府跡（倉住靖彦）、伊場遺跡（東野治之）などの木簡出土の主要遺跡からの報告、ならびに正倉院の伝世木簡の報告（柳雄太郎）がなされた。各遺跡の出土木簡については、木簡の出土状況の概要、木簡の内容、木簡と遺跡・遺構との関係などの問題を中心として報告され、正倉院の木簡については、新史料を含め木簡の内容の紹介、伝来過程について報告された。

第2日目は、木簡の諸問題に関する3つの報告があり、その後、質疑討論が行われた。

大庭脩報告「中国出土の簡牘について」は、中国簡牘について、その発見の経過、簡牘の形態と名称、研究史、今後の研究課題についての報告である。

狩野久報告「木簡の形態・用途について」は、考課関係木簡、帳簿様木簡など木簡の種々の形態の問題、また用途については、宮内における門通行のための通行証的な性格の木簡、大穀申請の際の紙の文書と木簡の使いわけの問題などを通じて、紙の文書に対する木簡の、木の材質を生かした独自の使い方を明らかにしたものである。

岸俊男報告「木簡研究の課題」では、木簡の出土・発掘調査に関する問題点、保存処理上の問題点、また形態・用途の問題について、日本における冊書の存否、また書籍書写の際の紙と木簡の使いわけの問題、更に、日・中簡の比較による日本の木簡使用の開始時期の問題などが報告された。

質疑討論は、日本における木簡使用の開始の時期、木簡と紙の文書との関係の2点を中心に行われた。木簡使用の開始時期については、日・中簡の付札の形狀の異同、簡の材質（竹か木か）、中国における簡牘使用の終末時期の問題などから論じられた。木簡と紙の文書の関係については、紙の文書に対する木簡の独自の機能という見解に対して、賛否の意見が寄せられた。

今回の研究集会は初めての試みでもあり、また問題の性質上簡単に結論は出ず、残された課題は多いが、関係諸分野の研究者が一堂に会し、実物に即して、これまであまり考えられなかった木簡に関する基礎的な問題について討議した意義は大きく、今後の木簡研究の進展が期待される。なお、今回は主として歴史学的見地に限られたが、今後なお問題を広げて続行する予定である。また、1976年度において、『木簡研究集会記録』を作成した。